

Y02a ハレー彗星が描かれた九谷焼の絵皿

井上 毅（明石市立天文科学館）、渡部潤一（国立天文台）

ハレー彗星が描かれたと考えられる九谷焼の絵皿が見つかったので報告する。

この皿は、神戸市在住のA氏が所有していたもので、皿の裏面には、彗星状の珍しい模様が描かれていた。A氏は長年この模様に疑問を持っておられ、明石市立天文科学館へこの皿を持ってこられた。そこで、同館に勤務する筆者が、この皿について調査をおこなった。

皿は直径39cmの平鉢型の絵皿で、木箱に収納されていた。木箱には「九谷やき、天保八年五月、東浦持」と墨書きされていた。九谷焼は、江戸時代の加賀藩（現在の石川県）の陶器職人によって製作されたやきものである。石川県立美術館でこの絵皿を見てもらったところ、この絵皿は九谷焼の一種で「正院焼」であることがわかった。「正院焼」は、天保元（1830）年に開窯し、天保14（1843）年に廃窯したやきものであり、最盛期は、天保6,7（1835,6）年ごろであった。この期間の彗星の記録を調べたところ、1835（天保6）年にハレー彗星が出現していたことがわかった。ハレー彗星は、日本でも観測されている。九谷焼の産地である加賀藩では、寺西秀周によるハレー彗星の観測記録が残されている。その記録から、当時加賀藩では、よく晴れた宵空に、最大20度の尾をひいた1等級のハレー彗星を見ることができたことがわかる。おそらく、絵皿を製作した職人を含む一般大衆も、ハレー彗星に気づいていたとおもわれる。

さらに、1835年に出現したハレー彗星の顕著な特徴として、彗星頭部が明るく輝き、太陽方向にジェットがのび、尖った形状になっていた。この絵皿に描かれた彗星模様は、矢のように尖った形状をした形状が描かれている。これは、当時のヨーロッパの観測者（シュワーベなど）によるスケッチと比較しても類似点があり、この皿を製作した職人が、ハレー彗星の形状の特徴を捕らえていた可能性がある。

ハレー彗星が描かれた陶器は、世界的に見ても、ほとんど例がなく、天文学史上貴重な資料であると考えられる。